

[報告]第35回歴史地震研究会巡検参加報告

名古屋大学減災連携研究センター* 浦谷裕明

A Report of Field Trip during the 35th Annual Meeting of Historical Earthquake Studies

Hiroaki URATANI

Disaster Mitigation Research Center, Nagoya Univ.,
Chikusa-ku, Nagoya 464-8601, Japan

§1. はじめに

2018年9月22日(土)から25日(火)の4日間にわたり、大分県大分市にあるJ:COM ホルトホール大分にて、第35回歴史地震研究会(大分大会)が開催された。研究発表会のほか、22日には「大友氏遺跡と慶長豊後地震」と題する公開講演会が、また、25日には、別府湾沿岸における豊後地震津波痕跡地をめぐる巡検が実施された。本稿では、この巡検の模様について簡単に報告する。

1596年慶長豊後地震は、「瓜生島伝説」でも有名であるが、この他にも、同時期に発生したとされる伊予・伏見の地震被害とともに、諸史料の信憑性やその解釈などから、その発生日(閏七月九日とする説や十二日とする説など)や震源像について議論(例えば石橋(2018)、松崎他(2018)など)が尽きない興味深い地震の一つである。今回の巡検では、この慶長豊後地震に関連の深い地点を中心に、①フロイスらポルトガル人宣教師達の辿った道として府内の町から沖ノ浜、②柞原八幡宮、③佐賀関での早吸日女神社と町内散策、昼食の後、④奈多宮視察というコースを巡った。参加者は40名。大分市在住の郷土史研究家・日名子健二氏、日出町歴史資料館・平井義人氏、四国電力(株)・松崎伸一氏のお三方にご案内頂いた。

§2. 巡検の内容

巡検は、AM8:30 大分駅要町バス乗り場集合からはじまった。当日は、前日までの傘の手放せない天候とは違って変わって最高気温 26°Cの大変過ごしやすい秋晴れとなり、まさに巡検日和であった。以下では、時系列的に当日の巡検内容について紹介することとしたい。

①フロイスらの辿った道

大分駅要町を出発したバスは、デウス堂があったとされる地点(府内)から沖ノ浜まで、フロイスらが辿ったと考えられる道3km程度を走行し、参加者は、日名子氏による車内案内を頂きつつ、車窓から現況を眺めた。

ルイス・フロイスは、16世紀後半に宣教師として日本における布教活動に従事し、デウス堂は、彼らの活動拠点であった。また、フロイスが記した『1596年日本年報補遺』に慶長豊後地震津波に関する記述があり、ブラス(日本人キリシタン)宿泊所が沖ノ浜という船舶の停泊地にあったとされている。

デウス堂のあったとされる地点には、残念ながら史跡などは無く、ご説明がなければ認知することが困難な状態であった。また、沖ノ浜のあった地点は、大正時代の地形図では海中に比定され、地滑りによる海没の可能性を指摘されるとともに、このような現象と「瓜生島伝説」との関連についてもご紹介頂いた。参加者は、大分港五号地白灯台付近でバスを降り、ここからかつて沖ノ浜があったと考えられる方面を望み、当時の情景に思いを馳せた。



写真1 大分港五号地白灯台付近より沖ノ浜を望む

* 〒464-8601 名古屋市千種区不老町
電子メール: uratani.hiroaki @e.mbox.nagoya-u.ac.jp

②柞原八幡宮

沖ノ浜を発ったバスは、十分ほど走り、途中細い山道を縫って、柞原八幡宮に着いた。

柞原八幡宮は、海岸から3-4kmの山中に位置し、本殿の標高は180m程度である。境内は随分な傾斜地で、バスを降りてから石段を登り、息が切れてきたところでやっと本殿にたどり着いた。

八幡造の本殿をはじめとする社殿は、寛延年間の大火による焼失の後に再建されたものである。また、平安末期頃には豊後の一の宮となり、中世には大名大友氏の崇敬を集め、近世には歴代の府内藩主によって手厚く保護されてきたとのこと。

柞原八幡宮に纏わる史料として『由原宮年代略記』があり、ここに慶長豊後地震による柞原八幡宮における被害や府中での津波の様相が記述されている。

現存する『由原宮年代略記』は、明治期の写本であり、原本は見つかっていないとのこと。『由原宮年代略記』にある被害記述の日付が、上述の慶長豊後地震の発生日に関する議論の一材料となっているようである。



写真2 柞原八幡宮

③佐賀関での早吸日女神社と町内散策

続いてバスは、別府湾沿岸を1時間程東進し佐賀関へ到着した。

佐賀関では、平井氏のご解説を頂きつつ、早吸日女神社(関神社)および佐賀関北側港(別府湾側)から佐賀関南側港(臼杵湾側)への町中を散策し、地形との関係から慶長豊後地震津波の到達高さについて思いを巡らせた。

早吸日女神社は、一の鳥居(標高2m程度)から総門(4m程度)、本殿(8m程度)と徐々に高くなる緩やかな傾斜地に立地している。この早吸日女神社では、慶長豊後地震津波によって鳥居が流失し、本殿も浸ったとされ(『稲葉家譜』、『佐賀関史』)、従前、現在

の本殿位置が津波高の根拠となっていた。しかしながら、平井氏らの神社境内の変遷などについての丹念な調査検討から、慶長当時、本殿は現在の位置になく、少し下がった現在伊邪那伎社(6m程度)があるあたりであったことがわかったとのこと。また、地元伝承では神社に隣接する神主家の門(5m程度)まで潮が付いたなどともされているようである。その他、佐賀関における慶長豊後地震津波の被害を記した『玄與日記』からは、佐賀関北側(上関村)での被害が知られる一方で、南側(佐賀関村)での被害が知られていないことから、津波は北側(別府湾側)から南側(臼杵湾側)へは抜け得なかったとのこと。

参加者は、実際にこれらの地点を見て回り、現地に立ち、地形やそれぞれの高さ関係を比べることで、当時の津波の様子を実感することができたと思う。



写真3 早吸日女神社総門

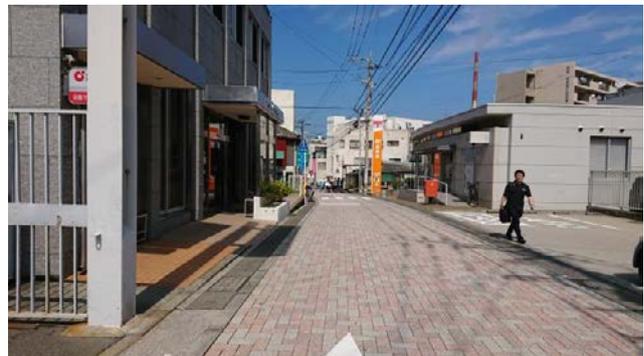


写真4 佐賀関越戸から佐賀関北側港方面を望む

佐賀関の町中散策を終え、お腹もすいたところで昼食となり、参加者は、佐賀関名物関サバ関アジを堪能した。そして、バスは別府湾をぐるりと、本巡検最後の目的地である奈多宮へ向かった。

④奈多宮

奈多宮は現在、奈多公園となっている標高6m程度の海岸砂丘上、松林の中にひっそりと鎮座している。その歴史は古く、天平元年(729年)創

祀とされ、戦国時代には、大友宗麟が奈多大宮司の娘を正室として娶るなど、中世当時の奈多宮の勢力の大きさを窺わせる。ここでは、松崎氏にご案内頂いた。

奈多宮における慶長豊後地震津波による被害については、従前、社殿楼門等、すべてが流失したと考えられてきた（『一楼台の額』、『閑居口号』）が、一部の建造物では全く無事であったとする記述や、『八幡三神像』や『宇佐八幡御託宣集』などの宝物が現に残されていること、また記述をよく読むと本殿の流失は述べられていないことから、すべての建造物が流失したわけではない、とのこと。また、これに関し、現在の奈多宮は、楼門、拝殿、本殿等が隣接して比較的コンパクトなレイアウトで配置されているが、栄華を極めた中世当時においては、もっと広大な境内レイアウトであった可能性があり、流失被害を受けた諸殿は、もう少し低いところにあったと考えられる、とされた。

奈多公園の入り口にある鳥居をくぐり、数百 m 松林の中の砂浜を歩くと奈多宮楼門に着くわけであるが、石垣で囲われ一段高くなった境内敷地は、確かに、歴史ある神社としては随分コンパクトな感がある。仮に、この松林全体がかつての境内であったなら、そんなことを考えて歩いてみると、栄華を極めた中世当時の奈多宮の様相が窺われると同時に、現在の奈多宮敷地およびその周辺の地形に目をやることで、当時の津波の様子が感じられるように思う。



写真 5 奈多宮前面砂浜

§3. おわりに

上述のように、第 35 回歴史地震研究会の巡検は、慶長豊後地震津波に関する見識が深まる大変有意義なものであった。

将来の地震津波による災害を軽減するためには、

「歴史に学ぶ」ことが不可欠である。その際、実際に現地に訪れ、現場を観察することが、過去の出来事を認識する上で非常に重要となる。今回の巡検は、そのことに改めて気づかされた巡検でもあった。

謝辞

本巡検に関し企画および、当日の案内役を務めてくださった、日名子健二氏、平井義人氏、松崎伸一氏に対し、心より感謝申し上げます。

文献

- 石橋克彦, 2018, 文禄五年(1596)の豊後地震と伊予地震が同一地震(閏七月九日)である可能性, 第 35 回歴史地震研究会(大分大会)講演要旨集, 24
- 松崎伸一・日名子健二・平井義人, 2018, 1596 年豊後地震の発生日に関する考察, 歴史地震, 33, 260



第 35 回歴史地震研究会(大分大会)巡検 早吸日女神社総門前にて(松崎伸一氏撮影)